

研究課題	iPadを活用したG l o b a lな視点の育成及び探究活動のさらなる充実
副題	～世界へ目を向けながら地域の課題を解決する生徒を育てるために～
キーワード	探究、国際理解
学校/団体名	公立京都府立園部高等学校
所在地	〒622-0004 京都府南丹市園部町小桜町 97
ホームページ	https://www.kyoto-be.ne.jp/sonobe-hs/

1. 研究の背景

本校は京都府南丹市にあり、生徒は南丹市、隣接する亀岡市、過疎化が進む京丹波町など、多様な地域から通学し、進路希望も多岐にわたる。本校には、附属中学校から進学してくる中高一貫コース、大学進学を目指すG Aコース、様々な希望進路に対応するG Cコースと3つのコースがあり、多様な生徒が入学してくる。「Global&Aware」（世界へ、思いやりを持って）を教育方針に、多様な価値観を受け入れられる生徒を育てる教育を行ってきた。探究活動や国際理解教育に力を入れており、その学びを通し、世界と地域を結ぶ生徒の育成を目指している。

本年度は一人一台学習用端末導入3年目となり、全校生徒がiPadを用いて学習している。探究活動では、生徒が様々な情報に容易にアクセスできるようになったが、適切な情報収集方法、分析スキル、文章作成力の向上が課題として残る。また、昨年度から海外交流が少しずつ可能になってきているが、そこで得られた経験が探究活動に中々結び付いていないと言えない。探究スキルの向上と地球規模で課題をとらえる視点の獲得を目指していきたいと考えている。

2. 研究の目的

生徒がiPadを活用しながら探究活動に取り組む中で、探究スキルを向上させること。また、教科の授業や国際交流活動を通して地球規模の視点で地域の課題を捉える力を生徒に付けさせること。以上を目的に研究を行う。

過去の取組から、本校生徒の課題として、探究活動において、特に文章にまとめることに苦手意識を持つ生徒が多くいることが挙げられる。これを改善するために、特に2年生の総合的な探究の時間のシラバスの見直しを行いたい。また、「Global」な視点を持ちながら「Glocal」な問題を探究する視点と手法を身につけ、世界のどこで学び、どこで働こうとも、常に自らの生まれ育った地域を意識する姿勢を持った生徒、社会に革新を起こす生徒を育成することが、地域密着型の学校経営を目指す本校にとっても、世界に雄飛することを目指す生徒にとっても、必要な視点であると考えており、それを総合的な探究の時間の取組を通して実現したい。

3. 研究の経過

3月 令和6年度 1年及び2年「総合的な探究の時間」担当者打合せ

4月 職員会議 令和6年度 Area Study 実施計画の説明

Area Study 開始（12月まで10回実施）

- 5月 1年生一人一台学習用端末（iPad）の使用開始
2年生 ミニ探究活動（Power Point 資料作成）
- 6月 2年生 GA・GC コース：一人一テーマによる探究開始
2年生中高一貫コース：グループによる探究開始
- 9月 2年生総合的な探究の時間で「台湾研修旅行」事前学習の実施
1年生グループによる「ミニ地域探究」開始
- 10月 2年生 研修旅行フィールドワークの実施（台湾）
- 11月 2年生 論文作成及びクラス内プレゼンテーションの実施（～12月）
- 12月 1年生 クラス内プレゼンテーションコンテストの実施
1年生 学年発表会の実施
- 1月 2年生 学年発表会の実施
総合的な探究の時間アンケートの実施
- 2月 グローバルネットワーク京都交流会参加
生徒実践発表会の実施
- 3月 京都府立大学窪田好男研究室主催「総合的な交流の時間 2024」参加

4. 代表的な実践

（1）1年「総合的な探究の時間」

1年生については、自ら問いを立て、根拠のある情報を基に課題についてじっくりと考える力を身に付け、自らが調べたことを文章やスライド形で発表する力を身に付けることを、段階を踏んで実施することを計画した。

4月に図書館オリエンテーションを実施し、図書館の使い方だけでなく、書籍による情報とインターネット上の情報の違いや公的な情報にアクセスすることの重要性を伝えた。その後、地域に対する関心を高めながら、情報をまとめて発表する練習をするために、通学圏である亀岡市、南丹市、京丹波町について調べる課題に取り組んだ。6月からiPadを使うことが可能になり、調べて発表資料を作成する上で活用することができるようになった。ホームルーム教室については全教室プロジェクター、簡易スクリーン、Apple TVが設置されており、生徒の端末から投影することができ、準備から発表まで施設面では問題なく進めることができる。

2学期は地域の課題について調べてまとめる活動を行った。昨年度より探究に対する心理的ハードルを下げるため、1年次は個人ではなくグループでの取組としている。グループ内で協力する中で、役割を分担するなど協働する力を伸ばすことができたと考える。

3学期は第2学年で実施する研修旅行の訪問地である台湾についての基本的な事項について学習した。時間は限られていたが、言語、文化、歴史などそれぞれが興味を持ったテーマで調べ、台湾に対する興味・関心が高まった。また、2年次の探究活動につながる、ミニ探究活動も扱うことができ、限られた活動時間を有効に活用することができた。

(2) 2年「総合的な探究の時間」

本年度は探究スキルにおける課題の一つである、文章作成の向上を目標として活動を行った。担当者会議の中で、昨年度提出することができなかった京都府教育委員会が主催するグローバルネットワーク京都・論文コンテストへの作品提出を一つの目標に掲げ、そこから逆算して取組の予定を立てた。なお、担当者会議は年間24回行い、予定の確認だけでなく、取組中の課題を共有し、担当教員間でアドバイスを出し合う有益な場となった。

2年1学期には、「探究とは何か？」を確認する取組を行った。説得力ある発表とするために、背景情報の理解や根拠となるデータを集めることの重要性を意識させることに主眼を置いて、グループによるミニ探究活動に取り組んだ。昨年度同じ取組を行った際と同じく、自分たちの主張をしっかりとした根拠を示してまとめることの難しさを感じたグループが多くあり、2学期の課題研究ではこの課題を克服できるように指導することができた。

2学期はコース毎に異なる課題研究を行った。中高一貫コースとGAコースでは、地域という枠にとらわれることなく、社会の様々な課題について調べ、その解決策を考える活動に取り組んだ。中高一貫コースはグループで課題に取り組み、最終的に英語で発表資料を作成し、英語で発表を行った。GAコースは一人一テーマで取り組み、日本語で論文にまとめ、日本語でプレゼンテーションを行った。また、GCコースでは、自分たちの暮らす地域に絞り、一人一テーマで地域の課題とそれを解決する提案を行うことを目標に探究活動に取り組んだ。GAコースと同じく、日本語で論文にまとめ、プレゼンテーションを行った。

11月には論文執筆を終え、プレゼンテーションの準備を行った。論文に関しては、担当でグローバルネットワーク京都・論文コンテストに提出する作品を選出した。提出した2本の論文のうち、サテライトオフィスの誘致を提案する作品が佳作を受賞した。GA・GCコースについては11月から12月に、各クラスで発表会を行った。また、中高一貫コースについては11月にグループによる英語での発表を行うことができた。クラス内で優秀な発表をした生徒・グループは、1月に実施した2年生の学年発表会に参加した。また、中高一貫コースで優れた発表をしたグループについては、グローバルネットワーク京都交流会で英語プレゼンテーションを行った。

学年発表会終了後はこれまでの取組を自身の将来につなげるために、キャリア教育の一環として進路探究を行った。自分の特性を理解し、社会において自分の果たせる役割は何かについて考えながら、具体的な進路希望先を設定して志望理由書を書く活動に取り組んだ。

(3) 海外研修旅行

本年度は5年ぶりに海外研修旅行を実施することができた。全コース共通で、10月に研修旅行で台湾を訪問した。9月には総合的な探究の時間を使い、訪問地の情報について学ぶ機会を持った。日本とのつながりの強い台湾であるが、生徒の多くは知らないことが多く、事前学習を通して研修旅行への意識向上につなげることができた。研修旅行では、現地でしか得られない情報の重要性を理解するため、班別自主研修を活用した。また、地元の大学を訪問する機会を持ち、英語を通して交流を行い、異文化に対する理解を深めただけでなく、同じアジアに

暮らす人たちとの共通点も多くあるという気付きを得た生徒も多くいた。現地の行程がスムーズに進むように教員間で連絡を取ったり、現地の活動をホームページにアップロードしたり、メッセージを配信したりするのに、モバイルルータを活用した。

(4) Area Study

本年度も、1年生の希望者を対象としてArea Studyを実施した。このプログラムは、京都産業大学との高大連携による取組である。国や地域の枠を越えGlobalな視点で世界の諸問題について考える基礎を養うため、世界を3つのArea（ヨーロッパ圏・アジア圏・英語圏）に分割し、それぞれの国や地域の言語や文化について学ぶ講義が中心のプログラムである。外国語学部に加えて、国際関係学部、さらには広く世界について知るために理系である理学部や生命科学部の先生も講座を担当していただいている。異文化に触れ、広い視点から問題を見る力を養える機会となっている。

5. 研究の成果

(1) 「総合的な探究の時間」の取組について

1年生については、探究的な学びに必要な基礎的な力の育成を目指したプログラムを実施してきた。地域探究を終えた2学期末にアンケート調査を実施し、入学時と現在のスキルについて自己評価を行った。以下の項目について、「1」（非常に低い）から「10」（非常に高い）の10段階で評価を行った。

取組を終えて、全ての項目で力が伸びたという結果になった。絶対的なスコアや伸び率に差はあるものの、生徒の実感としてできるようになったことがわかる。

1年 取組前後での自己評価	取組前	取組後	差
項目 1 検索エンジンを使って調べる力	5.9	6.7	0.8
項目 2 Word を使って文章を作成する力	5.0	6.1	1.1
項目 3 調べた情報をわかりやすく文章にまとめる力	5.3	6.1	0.8
項目 4 文章を読み返し推敲する力	5.3	5.9	0.6
項目 5 プレゼンテーション用のスライドに情報をまとめる力	4.9	6	1.1
項目 6 スライド作成で、文字の大きさ、構成、色使い等デザインを考える力	5.3	6.3	1.0
項目 7 メモを見ずに発表する力	4.5	5.3	0.8
項目 8 みんなが十分に聞き取れる声の大きさで、はっきりと話す力	5.3	6.1	0.8
項目 9 聴いている人の反応を見ながら話す力	4.8	5.3	0.5

2年生については、中高一貫コースとGAコースで地域の課題に捉われない探究テーマの設定を可能にした、その結果、海外の事例や世界的な課題に目を向ける生徒の数が増加した。生徒実践発表会にGAコース代表で発表した生徒は「過重労働とフレックスタイム制」というテーマを扱い、ドイツと日本の労働環境の比較を行った。

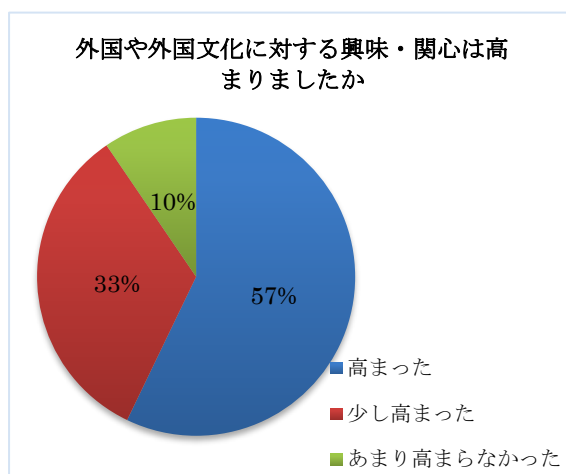
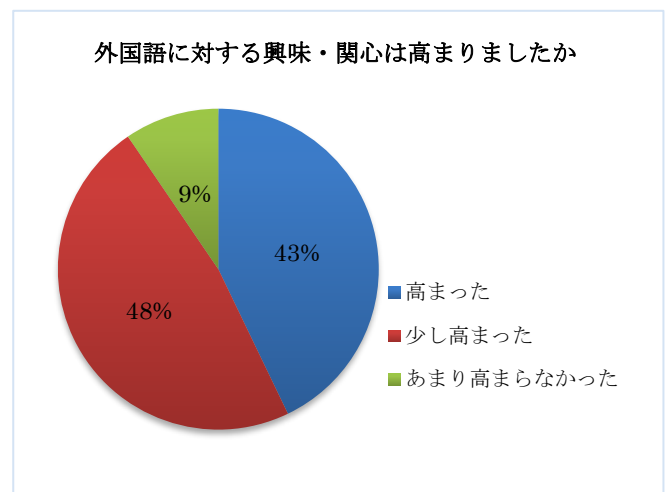
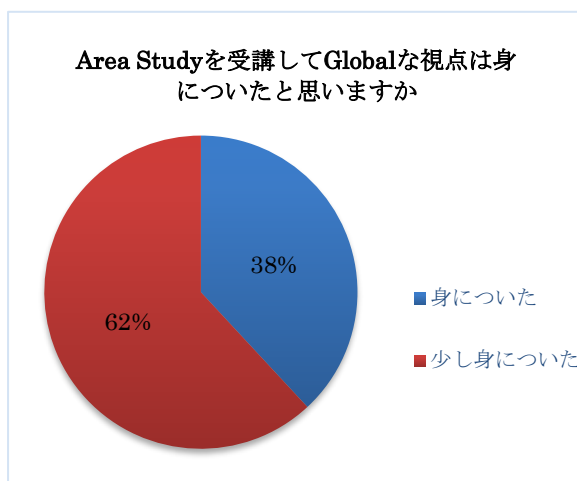
また、個人で行う探究については、全員が論文作成に取り組んだ。担当者会議の中で、約70本の論文からグローバルネットワーク京都・論文コンテストに提出する作品を2本選出し、サテライトオフィスの誘致を提案した論文が佳作を受賞した。論文作成については、担当者間で議論を重ね、スケジュールの決定や指導方法の共有を行った成果が出たと考えている。

1・2年生の優秀発表者は、2月に行われた「生徒実践発表会」でも活躍の場が与えられ、1年間の取組の成果を他の生徒と共有することができた。参観生徒の多くも刺激を受けており、特に1年生は来年度先輩の発表を超えたいと感じたようである。

学校外での発表の機会として、京都府立大学公共政策学部の窪田好男研究室主催「総合的な交流の時間 2024」が3月に南丹市で開催され、本校1年生の1グループが総合的な探究の時間で行った「耕作放棄地の活用」をテーマにした発表を行った。大学の教員、大学生だけでなく、南丹市職員の方などを前に堂々と成果を発表し、好評を博した。

(2) Area Study

1年生希望者対象に行ったArea Studyは本年度26名の生徒が受講した。全10回の講座終了後に実施したアンケートの結果、参加生徒の多くが外国語や外国文化への関心を高め、グローバルな視点を持つようになったと感じている。



6. 今後の課題・展望

本年度は2年生の総合的な探究の時間で作成した論文を、グローバルネットワーク京都・論文コンテストに提出し、入賞を果たすという成果をあげることができた。2年生の事後アンケートでは、特に聞き手を意識したプレゼンテーションに関するスキルに苦手意識を感じている生徒が多く、今後の課題として取り組みたい。論文執筆指導については、担当教員の負担感も大きく、1クラス2名という指導体制を見直したり、全校体制での指導を検討したりする必要があるかもしれない。

海外研修旅行を再開できたが、実施時期の問題もあり、課題研究への活用が難しい状況である。研修旅行は園部高校の学びの大きな柱の一つであり、探究的な学びの場としての研修旅行の在り方を再考することが求められる。

研修旅行以外の国際交流活動については、コロナ以前の取組に加えて、新たな交流校やオンラインでのつながりも着実に増えており、生徒もその恩恵を実感できるほどである。また、Area Study は継続・発展できるように考えており、より多くの生徒が参加できるよう内容や実施形態の見直しも行いたい。

7. おわりに

昨年度に引き続き、研究助成を活用しながら、「総合的な探究の時間」を中心に、世界に目を向けながら、地域の課題を考える活動を通して、生徒が高校卒業後も活用できる力を育てる実践を進めることができた。これまでの取組の中で課題に感じていた、生徒の文章でまとめる力や、より広い視野から物事を捉える力の育成について、校内の多くの教員で知恵を出し合いながら取り組むことができたと感じている。コロナ禍で停滞していた国際交流活動を再び活発に行えるようになり、生徒の学びに向かう姿勢も良い方向へ変化しているように思う。数値として表すのが難しい部分もあるが、英語での発表や世界の課題に目を向ける生徒の増加は、こうした取組の成果が少しずつ現れてきているのではないだろうか。

今後も学校全体で取り組む組織づくりを前進させ、これまで以上に外部機関との連携を充実させていけば、さらに大きい成果が得られると確信している。本校でこれまで実践してきたグローバル教育やパフォーマンス評価の実践という財産を活かしながら、今年度の実践を途切れることなく継承していき、生徒たちが高校卒業後に社会で活躍できる下地作りができるよう、今後もICTの活用も含めて教育内容・方法を改善していきたい。

最後になりますが、本年度このような貴重な機会を与えていただいた、パナソニック教育財団関係者の皆様に紙面を借りて深くお礼を申し上げます。

8. 参考文献

- ・西岡加名恵他(2017)『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる』学事出版